

夢 いろいろのち

ちゅうま ともか
中馬 朋香

私の祖母の父親は戦争で戦地に赴き、そのまま帰らぬ人となりました。祖母はまだ幼くて、父親がどんな顔でどんな性格なのかも曖昧にしか覚えていないといました。家族の中で疎開したのは祖母だけで、「毎日不安だったよ。怖かったよ。お母さん、お父さんって泣いた日もあったよ。ご飯も美味しくなくて、お風呂もなかなか入れなかったよ。」と私に優しく、切なく、時には泣きそうになりながら教えてくれました。想像をはるかに超えた戦争の体験談は、私に大切なことを気づかせてくれました。

一般人を巻き込み、真夜中に突然鳴り響くサイレン、逃げ惑う人々、道に横たわる死体、考えられない現実に、胸が苦しくなりました。この広い世界にたった一つ、他のものとは代えられないかけがえのない「いのち」が、爆弾一つで一瞬にして砕け散るのです。何人もの人が悲しみと憎しみ、不安と恐怖にか

られ、親を亡くした子どもが泣き叫ぶ光景は、当時は当たり前とされてきました。そう考えると、今日の私たちの平穏な日常生活が、実はとてつもなく幸せであることに気づきました。

「天上天下唯我独尊」私のいのちは天にも地にも、たった一つしかない尊いいのち。私は戦争と聞くと、この言葉を思い浮かべるようになりました。一人ひとり、かけがえのない人生、他の誰でもない私のたった一度きりの人生。今日も生かされている「いのち」の実感、明日への希望、叶えたい夢は私にだってあるのだから、兵隊になって帰ってこなかった曾祖父にもあつたに決まっています。

たとえ儚くとも、いのちはかけがえのない夢や希望が詰まった大切なものです。今でも世界のどこかで起こっているいのちを奪い合う戦争が、すぐにでもなくなることを願っています。